

「安泰な時こそ、心を主に向ける」

私達は二週間前、イスラエルの初代の王、サウルがどのように失脚していったかということを見ました。彼は「鼻から息する人間」を恐れ、「神を畏れる」ことがありませんでした。これがサウルの失脚へとつながりました。私達もサウルと変わらず、とかく人を恐れるものです。しかし、私達が本来、恐れるべき唯一のお方は神なのだとのサウルの失脚は私達に語りかけています。

先週、私達はダビデが巨人ゴリアテと恐れずに戦ったこと、自分の命を狙うサウルの息の根を止める状況にありながら彼に剣を向けることをしなかったことについてお話ししました。そして、ダビデがこの二件について神の御心にかなったことをすることができたのは、彼が「そのために予め備えていたからだ」ということをお話ししました。

しかし、そんなダビデも私達と同じ「鼻から息する人間」でした。彼も人である限り、完全ではありません。彼もその生涯、いくつかの大きな失敗をしました。ダビデの失敗として私達がまず頭に思い浮かべること、そう、それはあのバテシバとの出来事です。

ダビデをつけ回したサウル王は戦死し、ダビデはイスラエルの王座につきます。神の恵みとあわれみによりイスラエルは他国との戦いの最中にありながら、その戦は勝利が続き、国も安定します。ゴリアテを倒して以来、ダビデは優れた軍人としてイスラエルの先頭に立ち、その指揮にあたってきましたが、国力が安定してきますと、特別なことがない限り、彼はエルサレムにとどまり、自分の部下が彼に代わり戦地で戦い、その戦いも順調で、穏やかな毎日を王宮で過ごしていました。

そんなある夕刻、昼寝から覚めたダビデは王宮の屋上にあがりました。心身ともにリラックスし、眼下を眺めれば一代にして自らが建てあげた城壁で囲まれた街を見下ろすことができます。エルサレムに行きますとダビデの町という遺跡が今も残っています。それはケデロンの谷に沿って作られた町で城壁で囲まれています。ここからは今日、ツアーが出ており私達は

そのダビデの町に入っていくことができます。そのツアーではその遺跡の一番高い場所から谷間に下っていきます。ということは、おそらくその一番、高いところにダビデの宮殿があり、そのバルコニーで彼は眼下にある自らが建てた町を眺めることができたのでしょう。

ダビデがそこにおりますと、水しぶきの音が聞こえてきました。目を向けますと、ある家の中庭で水を浴びている女性がいたのです……。ダビデがいる王宮は多くの兵士によって守られている場所で、そのバルコニーはダビデにとって最も安全な場所でした。もちろん、彼はその場所で軍服を着、剣を帯びている必要もなく、それこそガウンを羽織って気を休めることができました。しかし、その最も安全で快適な場所が一転、最も危険な場所となりました。その時、彼の心はどんな状態だったのでしょうか。そうです、私達は忘れてはなりません。ダビデも鼻から息する人間だということ。

ダビデがその女について調べてみますと彼女の名前はバテシバといい、イスラエルのために戦地に行っている自分の部下、ウリヤの妻であることが分かります。しかし、ダビデはそれを知りつつも彼女を自分の所に呼び、彼女と関係をもちます。やがて彼女はダビデの子を宿していることが分かり、ダビデは自分のしたことが公にならないようあの手この手を尽くします。しかし、どれもうまくいかず、最後にダビデは自分に対して忠誠を尽くしたバテシバの夫ウリヤを戦いの最前線に送るように仕向け、彼はそこで戦死するのです。一つの罪を隠すために、別の罪が上塗りされ、転がるようにして彼は罪の奈落の底に落ちました（サムエル記下12章）。

高校時代の夏休み、私は事故を起こしました。その時、湘南海岸沿いにあるレストランでのアルバイトを終え、夜遅くバイクにまたがり、海岸線のなめらかなカーブを曲がり切れずにガードレールに衝突したのです。その時、私はバイクを運転してから半年ぐらいが経ち、そこそこ自分は運転ができる、もっと言いますと運転がうまいと思い始めていた時でした。ですから、そのカーブもかっこよく曲がれるとスピードを落とさずに曲がろうとしたところ、曲がり切れずに衝突したのです。さいわいケガはありませんでしたがスポークが曲がり、それ以上、運転ができなくなったバイクを修理するために、その夏のアルバイトで稼いだものは全て消えました。こ

の経験ゆえに私は今でもカーブを曲がる時には必ず減速します。あの時の「しまった！」という思いと「ドキッ」とした思いが心に刻まれているからです。

私達が危機に直面している時、私達は注意深くなります。そして、その注意深さが私達を救ってくれます。しかし、私達が何の問題もない時、もっといいますと物事がとてもスムーズにいつている時、私達は注意深さを失います。油断します。傲慢になります。その時が一番、危ない時です。

中国の兵法（戦に勝つための戦略）の中に、「敵を傲慢にさせる」というのがあろうそうです。確かに敵が傲慢になり始めたら、それはチャンスとなります。つけ入る余地がいくつも出てくるからです。相手は油断をするからです。注意深い備えを怠るようになるからです。バテシバの一件が起きた時、自分にも国にも危機はなく、ある意味、ダビデは人生においても公私ともに最も穏やかな日々を過ごしていたのです。しかし、それが彼にとって最も危険な時となりました。

ゴリアテの挑発に立ち向かった時、サウルの狂気から逃れようとしていた時、彼は自分の命を失いかねない状況の中におりました。そのような時にダビデは自ら備えていたものにより、勝利を得ました。しかし、平穏な日々、昼寝から目覚めた時に、水を浴びる女性を見た時に、彼が備えていたものは役に立ちませんでした。

私達はこのダビデの失敗から知恵を得ます。「困ったときの神頼み」という言葉がありますように、問題がある時、危機に直面している時、私達は神様に助けを求めます。いつもより聖書を読みます。いつもより熱心に礼拝や集会にも来ます。私達は謙虚になります。慎重になります。このような状態になりますとその問題の解決が現実的なものとなります。しかし、どうしたことでしょうか、このような問題が解決されると、何事もなかったかのように聖書から離れ、礼拝、集会から遠ざかります。神様がどんどん、その優先順位から離れていきます。

そうです、その時、私達は思うのです。「自分の問題は解決されたのだ。もう、大丈夫だ」。ところがどっこい、私達が今日、ダビデから学ぶことは私達は問題が何もない時にこそ、しっかりと主につながっていなければならないということなのです。この安泰な日々の中で起こしてしまったダビデの問題は小さなことではありません。それは人の命を殺めるところまでいった問題です。それは危機の中で起きたのではなく、穏やかで平和な夕暮れに起きたのです。

アダムとエバもそうでした。彼らは何不自由なく、痛みも悲しみもない完璧な環境の中であの禁じられた実を食べました。そして、その影響たるや今日、私達はその時から人類に入ってきました罪の力に飲み込まれてしまうような世界に暮らしているのです。

もう一度、申し上げます。ですから、そのような平穏無事な時にこそ、私達は主につながっていなければなりません。危機の時の問題はそこに思いが集中して向けられますから解決しやすいものです。しかし、危機ではない時に起きていた問題は、それに気がつくことが遅く、根深く、解決が難しいことがしばしばあるのです。

ダビデは姦淫、虚偽、殺人の罪を犯しました。彼は権威をもった王ですから、その力により、自分の不祥事をもみ消すことができたでしょう。しかし、人を騙し、人を黙らせることができて、神様は全てお見通しです。神様は預言者ナタンを彼のもとに送り、ナタンは彼のなしたことが神の前においてどんなに大きな罪であるかを臆せずにダビデに指摘します。

ダビデはその場でナタンを捕らえ、獄につなぐこともできたでしょう。おそらく、当時の多くの王達は皆、罪の責めを感じることなく、そのようにしてこのようなことも何事もなかったようにしていたことでしょう。しかし、ダビデは違いました。

ダビデはその時、自分に向き合いました。そして、神にしがみつきました。彼はナタンの指摘の前に砕かれて、ひれ伏し、このような歌を歌いました。

1 そのとががゆるされ、その罪がおおい消される者はさいわいである。2 主によって不義を負わされず、その霊に偽りのない人はさいわいである。3 わたしが自分の罪を言いあらわさなかった時は、

ひねもす苦しむうめいたので、わたしの骨はふるび衰えた。4 あなたのみ手が昼も夜も、わたしの上に重かったからである。わたしの力は、夏のひでりによってかれるように、かれ果てた。

5 わたしは自分の罪をあなたに知らせ、自分の不義を隠さなかった。わたしは言った、「わたしのとがを主に告白しよう」と。その時あなたはわたしの犯した罪をゆるされた（詩篇32篇1節-5節）。

ダビデは自分がしてしまったことを自覚していました。そして、その罪を心に持ち続けている時の彼の心について彼はこのように書いています『3 わたしが自分の罪を言いあらわさなかった時は、ひねもす苦しむうめいたので、わたしの骨はふるび衰えた。4 あなたのみ手が昼も夜も、わたしの上に重かったからである。わたしの力は、夏のひでりによってかれるように、かれ果てた』。「自分の罪を言い表さなかった時」とはまさしくサタンに全てを指摘される前、あの手、この手でこの自分の罪を隠し通そうとしていた時であり、その時、彼はひねもす苦しむうめき、その骨が古び衰えたというのです。私は渴きましたどころではない、ダビデは枯れ果てたのです。

主にある皆さん、このような状態で毎日を過ごすということ、それはなんと苦しいことでしょうか。豊かさや力を甘受しながらも、このような心の状態である限り、その人は決して心が満たされ、再び平安に導かれることはないでしょう。

ダビデがしてしまったことに関して、それはまさしく「魔が差す」という言葉が一番、ぴったりくるのかもしれませんが。魔といえば私達はまず「悪魔」を思い起こします。「悪の力」を思います。確かにその時、ダビデは魔がさしたのですが、彼はその魔は「サタンによるもの、悪の力によるもの」とは言いませんでした。彼はそれは「自分がしてしまったこと」としたのです。

私達はしばしば、このような時に、それは「悪の力の仕業だ」といいます。しかし、そのような時に私達は「悪の力の仕業」というところに結びつける前に、まず一番最初に「自分に問題はなかったのか」ということを省みるべきです。そして、次に「そのことに関わっている人達はどうか」ということを省み、さらに諸々のことを省み、それらの後「そこには悪の力がはたらいていたのか」ということを思うべきでしょう。

最初から「それは悪の力です。ピリオド」にしたら、私達は自らを省みて、そこから学ぶことをせず、同じような問題が起きます。そして、その度に問題を悪の力のせいにしておりますと、その問題は未解決ですから、ますます大きなものとなります。このことについて微笑んでいるのはまさしく、その悪の力です。普通は自分が関わっていないことをお前のせいだといわれることは嫌なことですが、人が自分のせいにし、それゆえにその問題の原因を見極めることができずに、問題がさらに深刻になっていくということになれば、まさしく、その悪の力はたいそう喜んでいることでしょう。

ダビデは自らの罪を認め、彼は神にしがみつきました。詩篇51篇はダビデが作ったものですが、聖書はわざわざ、こんな添え書きをしています。

「聖歌隊の指揮者によって歌わせたダビデの歌。これはダビデがバテシバに通った後、預言者ナタンがきた時に歌ったもの」。そう、もはや彼がしたことは天下にあまねく知られ、彼はそのことを自覚し、鼻から息する者としてこんな歌を歌いました。

1 神よ、あなたのいつくしみによって、わたしをあわれみ、あなたの豊かなあわれみによって、わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。
2 わたしの不義をことごとく洗い去り、わたしの罪からわたしを清めてください。

3 わたしは自分のとがを知っています。わたしの罪はいつもわたしの前にあります。4 わたしはあなたにむかい、ただあなたに罪を犯し、あなたの前に悪い事を行いました。それゆえ、あなたが宣告をお与えになるときは正しく、

あなたが人をさばかれるときは誤りがありません・・・。・・・14 神よ、わが救の神よ、血を流した罪からわたしを助け出してください。わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう。 15 主よ、わたしのくちびるを開いてください。

わたしの口はあなたの誉をあらわすでしょう。 16 あなたはいけにえを好まれません。たといわたしが燔祭をささげてもあなたは喜ばれないでしょう。 17 神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません。

主にある兄弟姉妹。私達も鼻から息する者です。鼻から息する者であるゆえに、ダビデのように罪を犯すものなのです。そして、その罪を私達は自ら償うことなどできないのです。ダビデもそうでした。ですから、彼は神にその赦しを求めたのです。

私達は来月、イースターを迎えます。イースターの喜びの前に私達は十字架があったことを私達は知らなければなりません。十字架とは何ですか。十字架とは我々が償うことができない罪に対する罰をキリストが全て身代わりとして受けてくださったことです。私達にはもはやどうすることもできない、解決不可能な罪に対して、その十字架ゆえに我々はその罪から赦されると聖書は語り続けています。

ある方は思います。自分がしてしまった、あのこと、このことは、いくら神でもどうすることもできないだろう。いいえ、神の愛は私達がしてしまったことよりもはるかに大きなものです。神の愛と赦しが包み込むことのできない罪はないのです。ただ私達に必要なものはダビデがその最後に言っている私達の心です。

16 あなたはいけにえを好まれません。たといわたしが燔祭をささげてもあなたは喜ばれないでしょう。 17 神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません。

私達が自分の罪の償いとして、神の前に捧げものを持参しても神はそれを喜ばれることはありません。そもそも、罪とはそのような捧げものと交換して赦されうるようなものではないのです。神が私達に願うことは、我々

の砕けた魂であり、我々の悔いた心です。その心をもってキリストの十字架の前に一人、出よと聖書は言うのです。

詩篇116篇10節には「わたしは大いに悩んだと言った時にもなお信じた」という言葉がありますが、まさしくダビデは大いに悩んだ時にも、なお神様に対する信仰を持ち続けたのです。その心境たるや、自らがしてしまったことに対する骨が古び衰えるような絶望感でありました。しかし、そのような大きな悩みが彼を襲ってきても、彼はなお神を信じたのです。さらにさらに大きな大きな悩みが彼を襲ってきても、彼はなおもなおも神を信じたのです！

私達もダビデと同じ鼻から息する者です。事の大小、その内容は異なるでしょうが、ダビデと同じように私達の砕けた魂を、砕けた悔いた心をキリストの十字架の前に持っていこうではありませんか。自らのいたらなさ、自らの罪、それらに大いに悩むような時があって、それでも神の愛と赦しを信じ続けようではありませんか。もし、私達の愛する者が深く罪に陥ってしまっていたとしたら、彼らのその罪をも包み込む、神の愛が彼らに届くことができるように、彼らの心が砕かれ、神に近づくことができるように祈ろうではありませんか。

最後にヘブル人の手紙10章38節-39節を読んでこのメッセージを終えます。「我が義人は信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしの魂はこれを喜ばない。しかし私達は信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、命を得る者である」私達は鼻から息する自分を完全に信じることはできません。しかし、私達は2000年前に私達のためにカルバリの十字架で血を流してくださったイエス・キリストの愛を信じます。その信仰に立ち続け、命を得ることができる者とされているということ信じます。私達は信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立ち続け、命を得る者です。お祈りしましょう。